
カナデちゃんとヤミちゃんが機動戦士ガンダム S E E D で暴れるよ～！

メア

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

カナデちゃんとヤミちゃんが機動戦士ガンダムSEEDで暴れるよ～！

【Zコード】

Z3078Z

【作者名】

メア

【あらすじ】

アンラ・マンゴ暇潰しの為に殺された人々の意識が集合体となってガンダムSEEDの世界にチート貢つて転生させられた。

転生させられた先は、ユージン・ヒビキが生き残つたところ。
つまり、キラとカガリの妹なんだ。

そして、ルナティックコーディネイターに改造されたので、世界を

滅ぼしたら、リゴールへいらっしゃいました。

ヒロインはステラ、ルリ

世界の破壊

何処にあるのかも分からない空間に一人の声がする。

「こ、こはどこ、ぼくはだれ？」

「こ、こは死後の世界、お前は死者達の集合体」

死後の世界？ 学校がいいな？ 集合体って事は寄せ集めか～～だから記憶がないのか。

「あれは幻想。そしてなぜに疑問形？」

なんとなく～～？ それで、天国？ 地獄？ なんで死んだの？

「支離滅裂だな。まあ、我の暇潰しの為だけに殺したのだし、天国でも地獄でもないな」

そつか～～ならいいや～～

「あつせりしているな」

「スロリ幼女に殺されるならほんまうだから？」

「ヒテオの変わりの暇潰し要員には良さそうだ」

褒められた！ やつたね？

「しかし、いい加減本題に入るが、貴方達には転生してもいいの、チートもられるならいいよ？」

「くれでやるチートは五つだ。何がいい？」

「何でもいいの～～？」

「うむ。このアンラ・マンゴに不可能は無い」

「なら、努力すれば何でもできる才能上限無しと知つていれば何でも召喚できる召喚魔法、召喚した対象を服従させられる能力～～？あつ、もひるん全て説明書つきでね。」

「どれもアホな力じやな。他の一つはひどいから～～」

「後はいらないや～～

「なり、じつちで適当に改造しておけ。精々我を楽しめやろ」

「アイアイサー！」

新たな生命が産声を上げた。

「あなた、何處にこの女のナメ」

「つむ、おはなし子に育つだら、うれしい」

幸せな家庭だね！

でも、実際は……………」つち。

「あなた、何をするの！？」

「ふははは、私は実験に成功しスーパー・コード・インイーターを作り上げた！ 故に、私はスーパーを超えるウルトラ……………いな！ ウルトラを超えるルナティックコード・インイーターを作りあげる！」

わあ～マジドさんだ～～！

「おれの心」

「うるさい、邪魔だ！」

銃声が聞こえて、母親らしき物が出来上がりつた。

「もはやブルーコスマスにも邪魔させぬ！ ふはははははははははははは！」

それから、培養槽に入れられて身体中をいじくられました。身体の中はぐちゃぐちゃ、脳は量子コンピュータが取り付けられたり、苦痛やなんやらで精神が壊れかけた。

一年が立つて、動けるよくなつたので、血文字で召喚陣を書いて召喚を行つた。

「来たれ」アンラ・マンゴー

世界に穴が開き、中から闇そのものがはいで出て来た。

「何よ、こきなり呼んで……」

「世界を滅ぼして」

「ふやけ…………あれ?」

アンラは命令に従い、世界は闇に飲まれ無に帰した。

終わり。

「ひつ、終わらないうよー」

あはははー

「で、なんでこんなことしたのよ？」

「あんな世界壊れていーよーとこいつが、女の子だつたし！」

「まあ、ランダムとはいえ、あの狂氣科学者凄いわね。実際、ウルトラなら成功してたかも」

で、どうすんの？

「私は結構満足したけど、暇潰しにはなってないのよね。リコールよ。能力に神の召喚、従わせるのは禁止して、弱体化の変わりになんか付けとくわね」

了解、行つてきます～～！

新たに覚め？（前書き）

なぜか投稿できていなかったので再投稿

新たな目覚め？

目覚めたら、知らない天井が眼に入つたよ。

「気が付いたか」

「おじさんだれ？」

「ウズミ・ナラ・アスハだ。そして、こっちが姉のカガリ・ユラ・アスハだ」

「…………（こぐ）」

アスハ家とはまた色々とまずいね。いや、好き勝手にできるからいいかな？

「お父様、もういいか？」

「そうだな、後は任せる」

お父様が去つていった。残つたのはカガリ。

「いいが、お前はカナデ・ユラ・アスハだ。そして、私の二歳年下だから、私が姉だ！」

名前がカナデか。カガリを見るに、カガリは六歳くらいだから、私

は四歳かな。

「おこ、聴いてこむのかつー!?.」

聴いてません。

「おねえさまあ、カナナテはねむいのでとつみんまく

「おこつ、待てつー!?.」

「ニニニニニニ」

「もつ、寝てゐ…………」

「カガリ様、ビリですかつー!?.」

「くつ、もつ来たか…………」リリは逃げるしかない!?.

カガリは何処か行つた。これでよしつと。

「とつあえず、鏡さん鏡さんビリですか~」

部屋は何て言うかファンシーで、ぬいぐるみが二つぱこある。それも、4LDKが出来そうなくらいの部屋をまるまるつめつくすような数だ。その中で鏡を探すために適当に頭に受かんだフレーズを口ずさんだ。

「リリですよ~」

「反応が返つてきたー!?.」

天幕付きのベットの後ろから声が聞こえて来たので、そつちをみると姿見の大きな鏡があつた。

「ちやお」

「ちやお」

鏡の中には、金色の蒼瞳で蒼銀色の長い髪の毛をした天使のような美少女と同じく全身真っ黒な「スロリ少女」がいた。

「さて、なぜなにマンゴが始まるよ~」

「ドンドンパフパフなどの効果音が聴こえた。

「アシスタントは、私アンリと私アンリでお送りいたしま~す~」

「同じ人物じゃない」

鏡の中で分裂した「スロリ」。

「まあまあ、気になる質問を答えるよ、貴方がAngel Beats!の世界に行きたかったみたいだから、私が貴方の姿をAngel Beats!の天使ちゃんにしてあげました~」

「わ~~いらない事しやがつて~~」

「.....」

「貴方は右脳と左脳にエブレインといつ超高性能量子コンピュータ

が取り付けられているわ

流したな。

「そこにAngelP1ayerも入ってるし、貴方はマシンチャイルド、ニコータイプ、イノベイターもあるから気をつけてね。原作は10年後だから、後は好きにしなさい。ステータスも開けるし便利なものもついてるしね。後、何人かサポート要員召喚しどいたから、頑張つてね」

「結局、チートは何だつたんだ?」

ブレインで調べてみると、鍊金術が出来る事が判明した。後、身体が賢者の石だから質量無視で鍊成できるよ。

「まあ、ステータスを開くこつかな」

ステータス
技術レベル1
開発レベル1
操縦レベル1
戦闘レベル1
経営レベル1
肉体レベル2
召喚レベル1

どうやら、強いのを召喚出来ないみたい。最初だけコストとか完全無視で良いみたいだけどね。戦艦と機動兵器、パイロットならなんでもよしか。まあ、最初は放置だけど。明日から頑張るつ。

次の日、身体は動くのでサボリにやつて来たカガリを捕まえて家庭教師の勉強を一緒に受けた。

その後、グロッキーになつているカガリを放置して、図書館で読書しながら、エブレインを使ってモルゲンレー・テ・社とプラントにハッキングをかけて技術を吸収した。それからは、エブレイン二つとマシンチャイルド、ルナティック・コーディネイターの力をフル活用して開発と技術力の向上を行い続けた。

行動開始してから三年間がたつた。

やつたことは相変わらずの技術力と開発力を鍛えながら、戦闘技術を練習した。ガードスキルを天使ちゃんに操れるようになつた。鍊金術は金やダイヤモンドを鍊成して売り払いまくつて、オープに近い無人島を買い取つて、地下に秘密基地を鍊成した。チヨーリップ・ブ・クリスタル後は、ボソンジャンプなどの訓練をやり続けたらCC無しで問題無く転移できるようになつた。

「さて、いい加減戦力を召喚しよう。召喚するのはこの世界では異質な存在…………我が喚び声に答えよー」

秘密基地の奥深くで召喚された機体とパイロット。

機体名：モルドレッド

形式番号 RZA-6DG

分類 ナイトオブランズ専用KMF

製造 ブリタニア

生産形態 ナイトオブシックス専用機

全高 4.71m

全備重量 10.23t

推進機関 ランドスピナー

フロートシステム

武装 シュタルクハドロン（4連ハドロン砲）

小型ミサイル

特殊装備 ブレイズルミナス

乗員人数 1人

搭乗者 アーニャ

モルドレッドは、アーニャ（ナイトオブシックス）専用KMF。凄まじい砲撃性能と防御力を誇る重量級KMF。その火力とパワーによる強襲戦闘を得意としている。基本カラーは赤紫。

主武装は両肩にある一対の装甲を連結させることで構成される4連ハドロン砲・シュタルクハドロンであり、浮遊航空艦でさえも一撃で破壊してしまうほどの威力を誇る。また全身に小型ミサイルが内蔵されており、総合的な火力はケタ違いとなっている。超重装甲と機体全周をカバーするブレイズルミナスを併せ持ち、防御力も最高峰のレベルである。

機体の出力も極めて高く、KMFの頭部を片手だけで粉碎するパワーと、重量級ながらグロースターにも匹敵するほどの機動力を併せ持つ。

「……は……？」

彼女はアーニャ・アールストレイム

「ナイトオブシックス」の地位に就いている少女でマントの色はピ

ンク。ピンク色の髪を頭の後ろでまとめている。幼いながらも最年少でラウンズとなつた凄腕。

「ここは私の秘密基地」

「貴女が私のマスター？」

「そう。私が貴女のマスター。後、記憶は戻つてゐる？」

「…………戻つてゐる…………」

記憶が戻つた事に泣いて喜ん出入るアーニャを抱きしめて、しばりく宥めていた。

「私はマスターに従う」

「ありがとう。なら、先ずはモルドレッドを改造しよう。アーニャは適当に基地内を見学してて」

「わかった」

アーニャが去つた後、モルドレッドをハンガーにセットして、機体を弄る。今ままじや、ガンダムとの大きさが四倍も違つ。

「まず、動力炉を相転移エンジンに変えて、ディストーションフィールドとディストーションブラスト、装甲にP_HS₄装甲を追加、さらにブースターとGキャンセラー、腕は紅蓮参式の奴でいいや

モルドレッドの大きさも大きくなつて15Mくらくなつた。当然、ミサイルの発射数を増やした。

「さて、これから楽しくなりますね」

モルドレッドの改造が終わり、次の目的を狙うことを開始した。

アーニャたんの魔改造

Side アーニャ

私が召喚された時は、ブリタニア皇帝ルルーシュ君との最終決戦で、オレンジの人々に殺されそうになつた時、ここに連れて来られた。

「うん……記憶、戻つてる……嬉しい……」

あの人気が私の身体を好き勝手に使つてたんだ。それは許せないけど、それより皆が気になる。

「…………でも…………今の私は…………マスターに従うだけ…………」

記憶の御礼もあるから、今は私の全力でマスターをサポートする。

「…………それにしても、面白い…………」

地下はデータや研究所などの施設、地上は、ブリタニアの富殿のような施設と遙か太古に滅んだ恐竜が沢山いる。

「…………記録…………」

「グルルルウ！」

記録を録りながら歩いていると、大きな口を開けながら迫つて来る

ティラノザウルスに携帯を向けて「写真撮った。

「って、何してるの！」

「がふつ！？」

私の目の前で大きく口を開けて、私を食べようとしていたティラノザウルスの頭にマスターのキックが入り、ティラノザウルスは吹き飛んで行きました。

「…………何って…………記録…………？」

「…………もういい…………地上には勝手に出ないでね。猶大がわりにホムンクルス放つてるから」

「…………わかった…………」

「…………凄く残念…………無念。」

「そんなんに残念がらなくても…………まあ、時間が空いたら一緒に散歩しようか」

「うん」

「なら、いい。」

「さて、アーニャ、次は君の番だから行こう！」

「？」

分からないので小首を傾げてみたけど、連れて行かれた。

連れて行かれた場所は研究室。

「そこに裸になつて寝て。検診とか色々するから」

「分かつた」

言われた通り裸になつてベットに寝た。

「つ

注射を打たれて、点滴を入れられた。

「それじゃ、お休み…………」

私は意識がだんだんと無くなつて来た。

次に目覚めた時、私は培養槽の中にいた。

「…………ん

「起きた？ 気分はどう？」

「頭が痛い」

脳裏に色々と分からぬ言葉が浮かんで来る。

「アーニャには、エブレインとマシンチャイルド + エブレインにゼロシステムを組み込んでおいたよ」

「？」

「エブレインはこの脳裏にあるパソコン？
ゼロシステムとかマシンチャイルドって何？」

「マシンチャイルドはIFSとの親和性を高めた存在だよ。IFSは人間の思考をコンピュータに入力できるインターフェースで主にパイロットの機体操縦に用いられる。操縦者のイメージのみで操作する事が出来、煩雑な操作を簡略化する事を可能とした代物だよ。IFSは体内にナノマシンを注入し、補助脳を形成しこれによってイメージを機体へ伝える。このナノマシン注入には不快感を伴い、またナノマシン処理中は精神が不安定になりやすく、場合によつては幻覚（幻聴）を伴つこともあるらしいにけど、そつちは改良しておいた。脳にあるエブレイン…………生体コンピュータがアーニャのイメージ通りに身体や機体を動かしてくれるよ」

「なるほど…………ゼロシステムはまた別？」

「ゼロシステム（Z·E·R·O·SysteM）、正式名称「Zonining and Emotional Range Omni-tted System」（直訳すると「領域化及び情動域欠落化装置」）とは、分析・予測した状況の推移に応じた対処法の選択や結果を搭乗者の脳に直接伝達するシステムで、端的に言うと、勝

利するために取るべき行動をあらかじめパイロットに見せる機構だよ。

これは、コクピット内の高性能フィードバック機器によって脳内の各生体作用をスキャン後、神経伝達物質の分泌量をコントロールすることで、急加速・急旋回時の衝撃や加重などの刺激情報の伝達を緩和、あるいは欺瞞し、通常は活動できない環境下での機体制御を可能とする。更に外部カメラ、センサーによつて得た情報を、パイロット自身の視聴覚情報として伝達することも可能である。このため、通常のモニター機器は補助的なものでしかなく、基本的にコンソール中央部の球状レーダーおよび周囲壁面に表示されるエネミーマーカーのみで戦闘行為を行う。

まあ、本来機体につけるものをエブレインに投入したんだ。だから、機体を自分の肉体に置き換えたり、その逆もできる。簡単に言うとIFS、エブレイン、ゼロシステムの組み合わせで、ほぼノータイムで自身のやりたいように機体を動かして、未来予測で確実な殲滅を可能とする

「一騎当千?」

「多分」

「問題は、ゼロシステムに踊らせられない事、最優先はアーニャの生存でいいからね」

「了解」

「あつ、写真とかエブレインで撮れる?」

「あつ、写真とかエブレインで撮れる?」

「もちろん撮れるよ

「嬉しい…………」

早速、写真などの記録をエブレインに移した。

それから、鈍った身体のリハビリを行つた。その次に、格納庫に行き、大きくなつた私の愛機モルドレッドを見た。

「胸部にグラビティーブラスト発射装置、ハドロン砲はくつつけ無くとも威力は出るし、拡散タイプの追加と威力の増強、遠隔操作装置などに加え、腰にビームライフルも取り付けといったから、シユミレーターで訓練しておいてね」

「分かった。マスターはどうする？」

「私はホムンクルスの実験だよ！ 人が欲しいからね」

「頑張つて」

「アーニヤもね！」

去つて行つたマスターを見送り、私はシユミレーターに入った。

「ゼロシステム、IFS起動…………//シジョン開始…………」

それから、5時間ほど訓練して、ようやく扱えるよつになつた。ボソンジャンプはまだ怖いけど、そのうち克服する。

アーニヤちゃん可愛いよ。あの無表情がいいね。

「さすが最年少でラウンズに入っただけはあるね。もう、モルドレッドを扱い出してる」

こっちの作業も出来たし、ホムンクルス…………自動人形でも動かせるかな。

「うん、問題無し」

とりあえず、100体ほど作って生産プランの作成と施設の維持をやらせ。まあ、練成した方が早いけど面倒だしね。

「電話だよ、電話だよ」

「ありがとハロ」

自動人形の統括システムとして、サイコハロを作ったから問題ない。

「もしもしそう」

『カナデ、部屋にいないうだが…………もつすぐ時間だぞ。何処

にいるのだ?』

しまつた、今日は社交界だつた。

「お父様、カナーテは知り合いを連れて行くので少し遅れます」

『知り合いだと?』

「はい。私の護衛をして頂く契約をしました』

『勝手な事をするなど言いたいが、お前はカガリと違つて聰い子だから責任を持つなら好きにして構わん』

「ありがとうございますお父様……』

『つむ、出来る限り早くこい』

「はい』

ふう……ハーモニクスを置いて置くんだつたね。

「アーニャ、帰るから一緒に行こう。』

「分かつた』

アーニャを呼んでから、研究室でハーモニクスを起動させ分身を作

る。

「「「ジャンケンポン、アイゴーテシヨー。」」

「勝つた！」

全員がゼロを使ってジャンケンを行い、勝者が基地に残るんだ。

「オリジナルが負けた…………」

「「「それじゃ、カガリの相手よろしく」「」「」「

「ふんだ………アーニャヒイチャイチャするもん」

五歳の時からハーモニクスを使い、研究や開発などを同時進行で行っている。そのため、負けた奴が大変な目に会う。社交界とか面倒なんだよね。

アーニャの手を握つて基地から屋敷の近くにボソンジャンプして、部屋に戻つた。

「アーニャ、ちょっと待つてて

「うん」

急いでメイドが来る前にドレスに着替える。アーニャはベットに腰掛け足をぶらぶらさせているけど、アーニャの格好自体はラウンズの儀礼服だからパーティーに出ても問題無い。

「お嬢様っ！」

「あつ、もう着替えてますよつーーー！」

「私達の仕事を取らないでくださいーーー！」

だって、着せ替え人形みたいで嫌だからね。

「その方は？」

「この子はアーニャといって、私の護衛及び話し相手です」

「…………よめじぐー」

「「分かりました」」

多分、話し相手の方を信じたんだね。身長差はあるけど、アーニャの方がお姉ちゃんに見える。

「…………よめじぐー」

私はアーニャの手を握り、魔窟へと赴いた。

パーティー会場は厳重な警備体制が引かれていた。

「今日は厳重なんですね」

「はい、今日は財閥の方々がいらっしゃいますし、お嬢様の誕生日ですから」

「確かに今日でしたね」

「マスター、おめでとう」

「ありがとうございます」アーニャ。今日で八歳になりました

そん事を話してると、大きな扉のところに着いたら、大きな声と同時に扉が開いていました。

「カナデ・コラ・アスハ様、御入場っ！」

中に入ると、私と後ろに控えているアーニャに注目が集まり、逃げるよつにお父様のところへ行きました。

しばらぐ挨拶などの鬱陶しい事をこなしていた。

「ねえ、アーニャ。どうせくれるなら、ソキウスのデータや戦艦が欲しいよね

「ソキウスは分からぬけど、戦艦は欲しいね」

まあ、ボソンジャンプで転送出来るんだけどね。

「何言つてんだカナデ？」

「お姉様、御機嫌うるわしうござりこます」

「お前、おひよくつ…………お父様が呼んでたぞ」

「私は手をあげようとした瞬間に発せられたアーニャの殺気に飲まれたね。

「ありがとうございますお姉様。アーニャ、行きましょう」

「イエス、コアハイネス」

さて、お姉様を放置してお父様の所に来たんですが……
……非情に帰りたいです。

「来たかカナデ。こちらにいらっしゃるのはアズラエル財閥の方だ」

「初めまして、美しいお嬢さん。私はムルタ・アズラエルといいます。以後、御見知り起きを……」

「なんでブルーコスモスの人がここにいるんですか、殺していいですか？」

「ちょっと、AngelPlayer起動させますね。

「…………カナデ・ユラ・アスハと申します。アズラエル様」

「はい。そちらのお方は？」

「私の護衛をお願いした愛人…………」ほん、友人です」

「…………」

「冗談ですよ？（多分）」

白い皿で見られちゃいました。

「まあ、いい。アズラエル氏はお前を婚約者にしたいそーだ」

「あははは…………お父様、[冗談が美味しいですね」

「本氣だ」

「そーです。私は貴女が欲しいー」

「何を馬鹿な事を…………ブルー「スモス盟主である貴女が「一テイネイターの私をですか？」

バット Honduras 丸見えじゃ無いですか、このロコ「ンー・

「何故それを…………」

「もう、決まつた事だ」

さて、どうする?

マルタを殺してアズラエルの材料を得る?

鍊金術で事足りるし必要無い。なら、利用して捨てるか。サハク姉妹も気になるけど…………後回しでいいかな。

「分かりました。ただし、ある程度自由にさせていただきますよ」

「ええ、勿論。これでオープと我が財団の繁栄は約束されました。これからよろしくお願ひします」

「…………よろしくお願ひいたします」

アズラエルは私を人質とストレス解消、駒にしたいんでしょうが、私の思い通りに踊つて貰いましょう。

「狐と狸の化かし合い？」

狐は九尾でしょうけどね。

あれから少しして、アズラエルの家に連れていかれました。
そして、すぐに襲われそうになつたので逃げて自分に似せた自動人
形と入れ代わつた。

「私の人形、凄い事されてるね」

「始末する？」

「始末するべき」

犯されている自動人形を見ながら、多数のハーモニクスと会議する。

「女として許せない…………」

「男の私達は平氣だけど？」

「むしろしたい」

「…………」「…………」

私達の意識の元は、男6女3その他1だから、ハーモニクスの状態
になるといろいろ凄い事になる。

性格には男の4はオタクだしね。

「今殺せば、歴史が変わるから駄目」

「そりだけど見てられない」

それかも話し合いは平行線を辿った。どうせ意識も無い自動人形と
いう意見があるからね。

「なら、私達は勝手にする」

「そう、分かった」

「じゃあ…………バトルロワイヤル…………勝者に全意識が集積す
る事。勝負はSEEED終了まででいい？」

「……異議なし」

いつの間にか、オリジナルを無視して決まった。

「これは…………手段を選べない」

「召喚や鍊金術は使用回数制限は一人三回まで、令呪は奪取可能と
します」

令呪は召喚した対象に出る。気付かなかつたけど、アーニャのは背
中にあつた。

「アーニャは私が持つてくよ？」

「 」「 」「 うん 」「 」

「後、世界崩壊級などは無し、秘密基地は完全中立で開始は一週間後……」

細かいルールが決まり、ハーモニクス達は出て行った。
これって、最強の敵は自分？

あれ？ しかもアズラエル押し付けられてないかな？
やられた。

アズラエル家の一室。

「アズラエル様…………」の一人、完全に反応無くなりましたぜ？」

床には私とアーニャの人形が倒れている。今までの反応だって面白半分でハーモニクス達がやつてただけだし。

「ちつ、化け物の癖して以外に壊れるのが早かつたな

「コードイネイターなんてこんなもんでしょう」

「なら、第八研究所に送つておけ。エクステンデットのサンプルになるだろ？…………五体満足で殺さないようだけ注意しておけ」

「了解」

これは都合がいいね。戦力入手のチャンスだよ。

三日後、私達の人形が輸送されるのをアーニャと共に、上空からモルドレッドで追っている。

「田標、以前こちらに気付いていない」

私の後ろからアーニャの声が聴こえる。これは、私がアーニャの膝の上に座っているから。

狭いコクピット内じや仕方ないし、モルドレッドは意識だけでも操縦出来るから問題は無い。

「暇だから、盗聴でもしてみる?」

「うん」

アーニャが素早くコントロールを操り、人形から音声を拾つて来る。

『おい、積み荷のお嬢様はどうだ?』

『相変わらず壊れたままだ』

『そりゃ、俺も後で楽しませもらひつか。しかし、いいよな〜』

『何がだ?』

無事に盗聴できたみたい。

「面白一?」

「まだ、分からない」

アーニャの質問に答えつつ、盗聴された音に耳を傾ける。

『アンタって、今期から配属だろ?』

『ああ』

『研究員はモルモットの連中を好きに出来るんだろ?』

『確かにそうだな』

モルモットか…………やっぱり地球連合腐つてゐる。

「マスター」

見捨ててる時点でのこと言えないけど。

それに、アーニャを改造したんだから同じ穴のムジナ。

『女なら犯りたい放題じやねえか! つらいやましいねつ!』

『まあな。ただ、結果を出さなきやいけないがな。しかも、処理道具として実際に使わないと駄目だし、調査が入るらしいがな』

『面倒だが問題ないんだろ?』

『おやうくな…………』

なるほど…………介入決定。ハッキングをかけて細工をする。

『まづい、燃料がマシントラブルかしらねえが、流れ出てやがる。補給しなきやまづいな』

『大丈夫なのか?』

『ああ。近くの町に寄る』

『了解した。連絡はしておく』

チャンス。

「アーニヤ、近くの町に先回りして」

「了解…………」

モルドレッドの速度で輸送機を追い越して、町へと急ぐ。

町に着いたら、モルドレッドをボソン・ジャンプで基地に戻しておく。

『少し時間がかかるから、一いつひで休憩してきな』

『分かった』

『よし、着陸だ』

音が乱れてから、正常に戻った。どうやら、無事に着いたみたいだ

な。

『また後で』

スーツを着た男が輸送機を降りて町に出たのを飛行場の監視カメラで確認して、近づく。

「マスター、観られてる」

「え?」

周りを見ると視線が集まっている。そうだよね、街中にドレスと着飾った騎士のようなコスプレをしていたら仕方ないよね。

「あそここの服屋に入ろう」

「うん」

私とアーニャは、急いで店に入り服を購入する。

購入した服は私がTV番1-3話のエピローグで奏が着ていたの。アーニャがこれまたエピローグのオレンジ煙を育てていた時の服を選びました。

「目標は?」

「大丈夫、ここから大通り600メートル先の交差点を右に曲がった先にある喫茶店に入った」

「ありがとうアーニャ」

アーニャがほんの少し虚空を見詰めた後、私の質問に答えてくれた。おそらく、この町に設置されている監視カメラの映像を傍受して解析したんだと思つ。

「ゼロ、便利

「確かに……」

私達は、煉瓦が敷き詰められた中世のよつた町並みの中を走り、目的の喫茶店に入った。

「いらっしゃい。これは可憐ひしいお薬なんだ」

入った瞬間、コーヒーのいい匂いがして来た。

「『』注文は?」

「ブラック、後はマスターのオススメで」

「私はケーキ」

「はいよ」

カウンターに座つて、周りを見渡す。すると、田標がない……アーニャが何も言つてこないとなると、まだ中にいる。

「ちよつと行つてくる」

「こつてちよつしゃい」

私はトイレに向かう。

トイレの中には二人の気配があった。

私は男子トイレに入る。

「ちよつ、お嬢ちゃん、ここ男子トイレだよー?」

これはハズレ。

「中にはいました? 探してるんですけど……」

「ん~、いたよ。直ぐに出て来るだろうし、外で待つてな」

「はい、ありがとうございます」
男の人と外に出て、私は扉の前で待つ。

少しすると、水音が聞こえて来たので構える。

「ふう…………えつ?」

出て来た男を確認した瞬間、ガーデスキルバージョン1で剣を作り、
男の胸を突き刺しトイレの中に押し込んだ。

「がはつ…………な、何を…………」

「貴方に怨みはありません…………有りましたね。仕方ないとはいって、
あれは私の傑作の一つだったんですから」

「く…………そ…………」

「お休みなさい。良い夢を…………」

「ドアに鍵をかけて、男を奥に引きずる。

「名前はケイ・イズミ……… 生体データをスキャン

持ち物を漁り、全てを回収したら、調度スキャンが終了した。

「変化」

Autopilotを使って、肉体をケイに作り変える。

「よし、問題無し」

鏡でいろいろ確認してみる。問題は服だけです。

「死体は処理して来ましょ」

ボソンジヤンプで死体を基地に運び、自動人形に血を綺麗に掃除させて終わり。私は返り血なんか受けていない。

「ただいま」

「お帰り」

「戻ってるよ」

マスターの出したてくれたコーヒーを堪能しながら、アーニャのケーキを少しもらい。

「あーん」

「うん、 いけるね」

「うん」

一仕事を終えた感じでお茶を終えた後、男の分を含んで、多めの五倍の金額を支払って外にでました。

次に、服屋で男の服を買つて、裏路地で変化を行い、確認する。

「問題ないよね？」

「うん、 大丈夫」

「じゃあ、これからアーニャはモルダレッシュでしばらく待機をお願い」

「了解。 気をつけて……」

「うん」

私はアーニャと別れて、輸送機に搭乗した。

第八ラボに着いたて、諸々の手続きが終了し、試験を受けさせられた。

「ケイ・イズミ君。君は素晴らしい！ ランクBの研究員の資格が与えられた。ランクBは個人の研究室とモルモットが一体与えられた。

る

「は」

「モルモットのリストはこれだ。どれも処女、童貞だ」
表示されたリストには、番号、顔、性別、年齢、身長、体重など様々な事が書かれていた。

「この中から、好きに選んでいいんですか？」

「うむ」

私は、リストの中にあるた目的と明らかにおかしい少女を選択する。

「では、ナンバー256とナンバー868」

「了解した。ナンバー256番ステラ・ルーシュとナンバー868番ルリ・ホシノだな」

「はい」

これが神の言つてたサポートだろうな。

「研究員の健康管理のためもあるので、この一人は一ヶ月に一度確認があるから犯つておくよつて。精神が壊れていた方がマインドコントロールが効きやすいので、壊してもかまわんからな」

「了解しました」

「成果はホストコンピュータに送りておいてくれ」

「はい」

説明が終わったのか、研究室の鍵と地図を貰つて部屋に向かった。とりあえず、ルリとステラをしつかりと畜でみつ。

第八研究所1（後書き）

やつと艦長とメインパイロット一人めです

バトロワ

第八研究所の新任研究員ケイ・イズミになりました私は、届けられた二人を見る。

「こちらが、モルモットです。確認をお願いします」

二人の首輪に繋がった鎖を持つた係員の指示に従い、受領サインをする。

「それでは、失礼します」

邪魔者が居なくなつたので、改めて二人の幼い少女を見る。歳は私と同じ、八歳くらい。金の髪と水色の髪が印象的だ。そして、両手両足に手枷と足枷が、首には首輪とリードが付けられて痛々しい姿だ。

「さてと、私は……」

ケイも本当の名前じゃないし、本名もまずいよな……適當でいいか……む、あれは……あれ着せるならそれでいいや。

「君達のご主人様だ」

「「「」」主人様」」

二人は虚ろな表情で、マインドコントロールの刷り込みが行われたようだ。

「そう…………よし、外れた」

手枷や足枷、リードを外す。首輪は認証タグが付いているから、外しますい。

「次はこれに着替えて」

「うん」「はい」

一人に何故かあつたメイド服を渡すと、目の前で着替えた。少し、目線をずらしておく。

「着替えた」

「着替えました」

「じゃあ、まずは…………」

それから、私は二人の身体検査、運動など仲良くなる事を重点的に行つていつた。

ここに来てから一ヶ月、予定通りステラとルリの二人は懐いてくれた。

まあ、二人に他の人がどういう扱いを受けているかなどを実際に見せて教えたから、かなり楽でした。

後、アーニャを助手として招き入れた。当然、アーニャの人形は処理しました。

「二人共、覚悟はいいの？」

「はい。私の身体は既に改造されていますから…………構いません」

ルリはナデシコに乗る前、つまり、研究所にて弄られているところを召喚されて捕まつたみたい。ルリとしては、私に助けられた感じ…………特にアキトやコリカと会つていなかつた。

「ステラ、ご主人様好きだからいい」

ステラは愛情を「え」と言えなかつたからか、愛情を「えたら簡単」に堕ちました。

「それじゃ、やうづか」

「「はい（うん）」」

そして、二人を本格的に改造する。エブレイン、マシンチャイルド、ゼロシステムを標準装備。更にルリのエブレインは演算処理とゼロシステムにのみ特化させたら…………赤鳩みたいにできるようになつた。

ステラは左右の脳にエブレインが一個ずつになつた。これからは、ルリがオペレーター兼艦長の修行、ステラはひたすら高速戦闘の格闘戦に特化させた修行を行う。どちらもシミュレーターでだけどね。

培養槽に入った二人を観ていると、アーニャが報告に来た。

「マスター、ガンタンクの特許と開発報酬が出た」

この第八研究所の怖いところは兵器ならなんでもいい所だ。

「これで準備が整った」

「うん」

私はガンタンクによつてAランク…………つまり、ドックが一つ貰えた。

これによつて、研究所の付属施設ではなく、好きに使える私設ドックが手に入つたんです。

それから、早速ドックへ行つて盗聴、盗撮などを排除して儀式を行う。

「召喚するのは二つ。材料は腐るほどあるから平気

この第八研究所には怨念が満ち溢れているから、それをエネルギーとする。

召喚されたのはナーテシロヒと410m級重砲撃艦、ゴルンノヴァ。

「あ、改造するよー！」

ちなみに、相転移エンジンはインフレーション理論で説明される真空の相転移を利用し、真空の空間をエネルギー準位の高い状態から、低い状態へ相転移させる事でエネルギーを取り出す。

ナデシコは、全長298m、全高106.8m、全幅148m、
総重量37,530トン、収容人員214名

410m級重砲撃艦ゴルノノヴァは、魔王の武器“烈光の剣”（これが「スレイヤーズ」の「光の剣」と同じものだとされている）にちなんで命名された。多数のビーム砲を装備し、空間を歪めての「空間レンズ」で収束して威力を高めたり、拡散させて広範囲を攻撃したりすることが可能。また、弾道が歪曲されてしまうため、リープ・レールガン以外の攻撃手段では有効打を与えることは困難。ただし、艦首の「目」付近だけは外部の様子を「見る」ために歪曲の対象外であり、ここが弱点となっている。

「IJの一つを融合させる。形のメインはナデシコで行く

「うん。改造用に自動人形も呼び寄せた」

「ありがとうアーニャ。ルリとステラが培養槽から出られるまで結構時間がかかる（中で学習している）から、出て来るまでに頑張ろう」

「うん」

それから、私達は一艦を分解、融合させていった。

ロンドンの街中を楽しそうに歩く銀髪の少女、その隣にいる男性。その少女に同じく銀髪の少女がぶつかった。

「つーー？」

「マスターつーー？」

男性と少女は驚いた。なぜなら、彼女は胸を後ろからぶつかった少女の腕から伸びた剣によつて貫かれていたのだから。

「まず一人」

「カナデ、なぜだつーー？」

「坊やだからや…………そして、貴方もいらない…………」

男もあつさりと殺され、再起動したのか、周りからも次々と悲鳴があがつた。

「全く、ザビ家なんて…………」

その少女の言葉は続かない。なぜなら、彼女の頭は突如飛来した弾丸により吹き飛ばされたのだから。

その現場から800メートル離れた先にあるビルの屋上。そこには、先程の少女とその殺されたもう一人の少女とそっくりな少女がいた。

「ミッションコンプリート……………これで私は勝者に近く……………」

少女……………ハーモニクスのカナデは先程使ったアンチマテリアルライフルヘカート?を肩に担いだ。

「油断大敵だよ……………私……………」

「つ！」

ヘカート?を担いだカナデは首筋から、盛大に血を何も盛大噴き出した。

そして、何も無い空間から血塗られた刃を伸ばしたカナデが現れた。

「ミラージュクロイド……………便利ですよ?」

「そうだね。髪の毛を金色にした徹底的だしね」

「早いですね……………」

屋上の給水塔に座つた同じカナデが存在した。

「私も狙つていたからね」

「そう……………」

「じゃあ、はじめようか……………」

お互にガーデスキルを起動して、人間が出せる速度を超えた斬り合いが始まった。

数時間後、残つたのは金色に染めたカナデ。

「強かつた…………」

カナデは身体中の至るところから血を流して、死にかけているのが一目瞭然だ。

「…………」にいたら…………まことに…………ジャンプ…………

彼女は生き残るため…………彼女は適当に転移した。

「あら、大丈夫ですか？」

「…………」

「これはイケませんね…………お父様、いらっしゃつて――」

バトロワ（後書き）

力ナデVS力ナデでした。

ザフト編？ ラクスとラウ様降臨ー（前書き）

すいません、一話目の投稿が出来ていませんでした。
だから、投稿
しなおしておきました。

ザフト編？ ラクスとラウ様降臨！

Side ???

目が覚めた私の目の前には知らない天井がありました…………こ
こはどこ？ 確か私と同じハーモニクスと戦つて勝つて…………危
ない所をジャンプしたはずですよね。

改めて周りを見渡すと、綺麗な花々が咲き誇る庭園でした。

先程の天井は天蓋かな？

「あっ、気が付きましたか？」

ピンク色をした少女…………見覚えはないです…………この人が助
けてくれたのかな？

「はい…………」

掛かっている柔らかい布団を口元まで引き寄せて、少女を見つめる。
いつでも攻撃できるように…………私はまだ死ぬ気は無いですから。

「それはよかったです。もう、一週間も眼を覚まさなかつたので心
配いたしました」

「一週間…………」

とりあえず、安全みたいなので私のステータスを確認しましょう。

| | |
|-----------|----|
| ステータス | |
| 技術レベル | 6 |
| 開発レベル | 7 |
| 操縦レベル | 4 |
| 戦闘レベル | 8 |
| 経営レベル | 1 |
| 肉体レベル | 7 |
| 召喚レベル | 4 |
| 魔力レベル | 1 |
| 召喚回数残り | 14 |
| 錬金術使用回数残り | 12 |

肉体レベルが上がっているし、魔力レベルが増えているのかな？
召喚回数は、私自身がミラージュコロイドの発生装置で1回使つて
いるから、倒した人達の分だと思います。錬金術も同じだと思います。

「あの……大丈夫ですか……？」

「はい、大丈夫です。ここはどこですか？」

「ここはプラントにある私の家ですわ。あつ、申し遅れました私は、
ラクス・クラインと申しますの。貴女は？」

「私は……」

このままカナーテと名乗るのはまずいです。特にオープと関わるラク

スさんにだとかなりますいです。

辺りを見渡すと鏡の中に一人の少女の姿がありました。

「コーリ?」

「コーリさんと虹のですね」

「いや、違つ…………」「あつ、お医者様を呼んで来ませんとつー……」
……言つちやいました……

鏡に映つたのは碎け得ぬ闇、システムD、紫天の盟主
コーリ・エーベルヴァインでした。

『ちゃおー、金髪だつたから氣分的にその姿にしといたよ。感謝してね』

この神様は…………面白ければなんでもいいのかな?

『イグザクトリイー、あつ、ちゃんと紫天の書も用意しといたよ』

という事はあの三人娘もいるんですね。

『あつ、コーリ・エーベルヴァインの名前で住民登録とかしておいたから感謝してよね。あつ、面倒が無いように孤児として設定してあるからね。バイバイ～』

その言葉を残して神様は帰つて行きました。

「おいで、紫天の書…………」

呼ぶと全体が紫色で、真ん中に金色の十字があしらわれた本が現れました。

「一部を除いて内容は白紙…………あの三人は召喚でくないみたいですね」

書かれていたのは私の名前ヨーリ・ヘルベルヴァインと市民登録番号でした。

「…………」

「IJのお嬢さんですか…………」

それから、ラクスさんが連れて來たお医者さんの診察を受けました。

お医者さんの最初の診断結果は、栄養失調による氣絶だったらしいので、栄養の高い点滴を入れられていたから、もう大丈夫みたいですね。

「それで、お家が無いんですか?」

「はい…………両親は死んでしまって…………」

「…………めんなさい…………」

実際、間違つていません。私達を産んだ両親は私達が殺しましたから。

「そうですねー!」

「なつ、なんですか？」

いきなり大きな声にびっくりしちゃいました。

「貴女、私の妹になりませんか？」

「…………」

後ろ盾には一度いいけど…………途中で反逆者になるよね…………でも、それまでにザフトで高い地位にいればいいだけだよね。

「はー。よひしくお願ひし…………わふっー。」

ラクスさんに抱き着かれて、凶器に挟まれました。

「私、妹が欲しかったのです」

それから、私はコーリ・クラインとなり安定した生活を手に入れた。まあ、ラクスお姉ちゃんの襲撃さえなければですけど。お姉ちゃんの抱き着き癖はどうにかしてほしいの。死ぬほど苦しいから…………あの柔らかい肉の塊は敵です。

私がラクスお姉ちゃんの妹になつてから一年、九歳になつた私はお父様にプラントの技術部に連れていつて貰いました。

「これはクライン議員、どうしましたか？」

「すまんね…………娘がどうしても見学したいと一年くらい言つて
いてね。一応、上の許可は貰つてあるよ。すまんが、ようじく頼む
よ」

「はあ…………わかりました…………」

「ようじくお願いします」

スカートの裾を掴みながら、頭を下げて笑顔でお願いしました。

「わっ、わかりました！　後でサイン下さーーー！」

私はお姉ちゃんと違つて、ネットアイドル…………//クちゃんみたいに歌っています。

「まあ、後は任せたよ…………私は仕事があるのでね。ユーリ、迷惑を掛けないようにな」

「はい、お父様…………迷惑はかけません」

今日はお父様が技術部の上層部と会談するつこでこつこで来ました。

「では、ひかりんわ」

そして、私は研究員さんについて行きました。

ゲストパスを預いていった先は、何やら慌ただしく人々が働いていました。

「ひらがな食料生産プラントについて研究している場所です」

「ふむふむ」

説明を聞いていると、爆発音が聞こえて来た。

「何事だつ！」

「MSの動力炉開発部で爆発です！ 空いている人は手を貸してあげて！」

ジンかな？

「すいません、お嬢様…………安全が確認出来るまでひらがなに座りお待ちください。ひらがな警備員もこりますから」

「わかりました。ひのパソコンで遊んでもいいですか？」

「お好きにひらがなー」

研究員さんは去つて行つたので、私はパソコンの前に座つてゲストログインしました。

「これは食料生産プラントの設計シミュレーショングですね」

起動した画面に有つたアイコンをクリックして起動させたのはショムニーションでした。

「ふと、ひのを弄つて…………ひらがなプログラムを書き換えて……

.....」

OSから構造、部品まで作り替えて..... 時間を忘れて作り上げました。

「うん、これで完成かな？ 生産数は四倍、生産速度も三倍増えてるし..... 評価はS..... やつた」

「ほう、素晴らしい出来だ」

「え？」

慌てて後ろを振り返ると、仮面を付けた金髪の人がいました..... カツコイイです..... この人はまさかのあの人はではないですか？

「すまない、驚かしてしまったようだね。私はラウ・ル・クルーゼという者だ。見ての通りザフトの人間だ」

今はザフト成立から一年ですから、この人は20歳ですね。私とは11歳です。

「ラウ様、私はユーリ・クラインと申します。よろしくお願いします」

「よろしく。実は君の父上、クライン議員から君の護衛と案内を頼まれてね。クライン議員はどいつもこいつもお仕事が長引くようだね」

時計を見ると、素手に一時間が経過していました。

「わかりました。よろしくお願ひします」

立ち上がりながらとしたら、手を差し出されたので、手を取つて、立ち上がらせて貰いました。

「行く前にこのデータを提出してもいいかね?」

「はい、どうぞ」

「では、提出者ユーリ・クライン……………送信……………では、行くかお姫様」

「はい」

「あれ?」

「何かまずい気もしますが気にしなくていいよね?うん、気の性気の性。」

ラウ様に案内されながら、色々な所を回りました。

「これであらかた回つたが……………どうするね?」

「ラウ様、モビルスースが見たいです」

「ラウ様は止めて欲しいのだが……………まあ、私のバスでは君を通せ無いんだ」

ラウ様には敬語を止めていただきました。

「そうですか……………でも、私のバスは何処でも入れますよ?」

「ちょっと確認させてくれ……」

「どうぞ……」

「…………あの親バカは…………」

ボソッと呟いた言葉に、ラウ様の気持ちが窺っています。

「どうやら問題無いようだね。では、行こうかお姫様

「はい」

連れて行つて貰つた場所にはジンが三機ありました。

ジン

型式番号： ZGMF - 1017

所属： ザフト

全高： 21 . 43 m

武装：

MMI - M8A3 76mm重突撃機銃

MA - M3 重斬刀

M69 バルルス改特火重粒子砲

M68 キヤツトウス500mm無反動砲

M66 キヤニス短距離誘導弾発射筒 x 2

M68 パルデュス3連装短距離誘導弾発

射筒 x 2

スナイパーライフル

紫天の書のページにこんなのが浮かびました。

「おひあこです…………」

「あひらには新型があるな」

あひらにはシグーポー骨組みがありました。

「ん～～」

「どうした?」

「ジンにしても、シグーにしても性能が低いですね」

ガンダムを見てこるとそう思こますよね。ザクより下なんですから。

「新型機を低いと言われてもな…………」

「あれ? 子供の戯れ事と思わない?…………?」

「あのシコミレーショーンを見せられたら、お姫様をただの子供とは思わないね」

「なら、賭けをしませんか?」

「何を賭けるんだ?」

「お互い、勝つた方の言つ事なんでも聞くといつ事。勝負はモビルスーシのシコミレーショーンです」

「いいだろ？ だが、ハンテはあげよ！」

「でしたら、私は自分の機体を使いますね」

「あるのか…………まあ、いい」

それから、シユミレー・ションルームに移動して、私はジンの代わりに今の姿にある意味ピッタリな機体を紫天の書からロードしました。

シユミレー・ションに入つて、シートベルトを無理矢理締めて……問題がありました。

「手足が届かないっ！？」

『どうした？』

「すいません、ちょっと待つてください」

『わかった』

私は首筋からエブレインのコードを引き抜いて、シユミレー・ションシステムに突き刺して、キーボードを取り出してOSを書き換えた。

作業時間は10分くらいです。

「お待たせ…………しました」

『いや、構わないよ。ステージは宇宙にしておいた』

「はい。お手柔らかにお願いします」

『フフ、それはわからないな』

ラウ様が消えて、発射シークエンスに入りました。

「いじつ時は…………コーリ・クライン…………出ます!」

私は初めてのMS戦に挑みました。相手はラウ・ル・クルーゼ様…………相手に取つて不足はありません。

Side Out

ザフト編？ ラクスとラウ様降臨！（後書き）

タイトルの闇ちゃんは碎け得ぬ闇の闇ちゃんでした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3078z/>

カナデちゃんとヤミちゃんが機動戦士ガンダムSEEDで暴れるよ～！

2011年12月28日22時47分発行